

山中他界観念と虚空蔵信仰

—日本の葬送・他界観念の成立と民俗—

佐野賢治

前言

1. 葬送・他界観念にみる虚空蔵信仰
2. 山中他界観と密教的浄土観
—十三仏と十三塚—

3. 山中他界観の成立

—伊勢朝熊山金剛証寺をめぐる—

論文要旨

日本の葬式は、僧侶の読経・葬儀執行と民間の念仏講による念仏の詠唱などで営まれ、その二重構造化は早くに柳田国男によって指摘されていた。この二者に共通するのが、「十三仏」信仰である。十三仏は室町時代までに、地藏信仰を背景とした十王・十仏が敷衍され日本で創説された信仰である。十三仏信仰の有り様は民間の葬送・他界観と仏教が結合した「仏教民俗」の代表的事例と言ってもよい。

十三仏を山中に祀る月山・戸隠山など修験関与の霊山があり、その頂にて死霊が祖霊化したとの伝承が残る。十三仏は十仏に阿閼、大日、虚空蔵の密教的三仏が加わって成立するが、初期の三仏は金胎や両部の大日であり、やがて最終仏として虚空蔵菩薩が定位していく。虚空蔵菩薩は民間の念仏では極楽への導者として登場し、また地藏菩薩との併祀が説かれたりしている。ここで地藏（地・地獄からの救済）⇔虚空蔵（天・極楽への導者）といった垂直的他界観念は、山岳に依拠した修験者にとって受容しやすい思想であり、在来の山中他界観念・死霊入山信仰を斟酌しながら、浄土思潮の中で彼等が独自の密教的浄土観、他界観を再構成した表われが「十三仏」と考えた。伊勢朝熊山の「タケ参り」習俗や十三仏における密教的要素はこの点から了解できる。

十三仏は死者の追善供養としてだけでなく生者の逆修供養としても信仰されてきた。月山登拝を始めとする霊山登拝は生前における他界遍歴、彼岸巡遊ともいえ、逆修信仰の一面から把らえうる。従来その性格が不明とされてきた「十三塚」も塚を擬似山岳に見立てての十三仏信仰の発現であったと考えられる。

修験者は祖霊・御霊、死者・生者、民俗・仏教、の間に介在しながら日本の葬送・他界観を再構成したといえるのである。